

2024 年度 事業報告

(2024 年 4 月 1 日～2025 年 3 月 31 日)

2024 年度は、いわゆるコロナ禍に伴う行動制限などは各方面でほぼ解消され、社会活動や経済行動、教育活動が以前の状態を取りもどしつつある 1 年となりました。その影響もあつてか、祖業である論文事業においては、減少していた論文応募数が反転し、増加傾向となり、また論文事業に伴うその贈呈式や全国大会・実践発表会なども、新しい手法も交えて開催することができました。加えて学校の先生や保育者の皆さんに対する支援も、新しい取り組みを開始して一定程度の期間と実績を積み重ねることが出来ました。他方、子どもたちへの直接的な支援事業は、そのコンテンツのバリエーションを増やし、また開催地の幅を広げることができ、充実した 1 年となりました。

【公 1】 科学教育を中心とし、幼児および児童生徒の豊かな人間性の確立と創造性の育成を目指す事業

1. 幼児教育

(1) 「幼児教育支援プログラム」 (保育実践論文)

創設から 22 年目を迎えた「保育実践論文」は、2024 年度に 2 つの大きな変化がありました。まず 1 つ目は、最優秀園助成金の 200 万円から 300 万円への引き上げ。他の入選助成金もすべて増額し、65 年の歴史をもつ小・中学校対象の教育実践論文の助成金額と“完全に統一”しました。助成金の増額は、未来を生きる子どもたちのために研究を重ねられる園へのご支援はもちろん、人間としての土台をつくる乳幼児期の大切さを、広く、多くの方々にご理解いただきたいという思いを込めています。2 つ目は、論文に記載できる実践の対象年齢の、1 歳から 0 歳への引き下げ。同時に、審査の観点も乳児期からの実践に対応すべく改訂し、乳児からの“生活”の広がり、育ちや発達の連続性などを盛り込んだ他、自然や命と共生しながら社会と関わるなど未来志向の“これからの”保育を意識した視点を取り入れました。こうした、財団の社会へのメッセージと、現状の保育に添う内容を盛り込んだ保育実践論文には、前年より 27 件多い、148 園からのご応募をいただく結果となりました。

論文審査（選考）においては、すべての最上位候補園を実際に訪問し、現地調査を行いました。その結果、最優秀園には、前年度に審査委員特別賞を受賞された「荒尾第一幼稚園（熊本県）」の連続受賞と、個と集団の育ちを細かに分析された「岐阜市立加納幼稚園（岐阜県）」が選ばれました。また、1 歳児の「科学する心」の育ちを丁寧に追った「めずらこども園（大分県）」が「優秀園 審査委員特別賞」に選ばれました。

(2) 入選園による「実践発表会」(集合形式)・「科学する心を育てる」Gathering (オンライン) 開催

入選園の優れた保育実践を公開し、参加される保育者・教員と幼児教育・保育の重要性について学び合いを深める「実践発表会」を、2023 年度の論文受賞園 3 園にて開催しました（5 月 18 日「荒尾第一幼稚園（熊本県）」、10 月 26 日「みなみ若葉こども園（福島県）」、11 月 2 日「福井大学教育学部附属幼稚園（福井県）」）。いずれも前評判が高く、特に荒尾第一幼稚園は募集開始から 3 日、福井大学附属幼稚園は翌日に募集定員に達するほどの盛況でした。本会には文部科学省、こども家庭庁の後援の他、開催園の地元の行政からも多大なるご支援をいただき、荒尾第一幼稚園には荒尾市長と教育長、みなみ若葉こども園には会津若松市長がお越しになられ、受賞園へのお祝いの言葉を述べられました。

さらに、今年度まったく新しい試みとして、園での実践発表会に「幼小連携」について考える機会を取り入れました。一例として、みなみ若葉こども園では、小学校の先生によるポスターセッションと、園・小学校・中学校の先生、

大学講師、学生が混ざり、それぞれの立場から話し合うグループ討議の時間を設けました。乳児期に育つ「科学する心」が、学校での学びへの興味関心へと繋がるよう、今後もこのような機会を増やしてまいります。

また、遠方にお越しになることが難しい保育者のみなさまのために、論文を書かれた先生方が自らの実践について語る「科学する心を育てる Gathering（ギャザリング）」を7月6日オンラインで開催。保育者、大学の先生を中心に、約100名にご参加いただきました。

2. 子ども科学教育

（1）「子ども科学教育プログラム」（教育実践論文/未来へつなぐ計画）

従来から募集してきた「教育実践論文」については応募数が91校となり、2023年度から23校増加しました。働き方改革に伴う教員の勤務時間の削減など論文を執筆する環境は厳しいままですが、少しずつソニー科学教育研究会（SSTA）などの活動も新型コロナウイルス感染症前に戻りつつあるのが、この数字に反映されていると思われます。審査委員による厳正な審査の結果、最優秀校には国立大学法人 福井大学教育学部附属義務教育学校（福井県）と射水市立片口小学校（富山県）がそれぞれ選ばれました。そのほか、優秀校として11校、奨励校に41校（うち3校は新設の教育みらい賞）が選ばれました。また、3年目となる教員個人を対象とした「未来へつなぐ教育計画」には、全国から44名の先生方から応募いただき、厳正な審査の結果、10名の方が入選し、計画を実行するための助成を行っています。

（2）最優秀校による「子ども科学教育研究全国大会」の開催

2023年度「教育実践論文」最優秀校による「子ども科学教育研究全国大会」は、10月19日に福島市立三河台小学校（福島県）において、10月25日には刈谷市立刈谷南中学校（愛知県）においてそれぞれ開催しました。両校とも数多くの授業を公開し、子どもたちが主体性を持って学ぶ姿が見られました。また、会場校以外の多くの教員が授業や研究会、ポスターセッションに積極的に参加し、先生方自身の「主体的で対話的な深い学び」の場とすることができました。

【公2】 科学教育を中心として豊かな人間性の確立と創造性の育成を目指す児童生徒対象の体験活動事業

1. 科学の泉－子ども夢教室

「科学の泉－子ども夢教室」は、ノーベル化学賞を受賞された白川英樹博士が塾長として、『自然を学ぶ』をテーマとした活動で、自然豊かな場所で共同生活を伴う5泊6日の探求教室ですが、昨年まで同様、2024年度の開催も見送りとなりました。一方で、これまで15回に渡って開催され、400名を超える卒塾生はこの経験を糧に様々な進路を選択して、活躍しており、2024年度も東京科学大学（旧東京工業大学）の大岡山キャンパスにおいて、卒塾生自身が企画をした交流会が開催されました。

2. ソニー教育財団が主催する「ものづくり教室」

公益財団法人の財務3原則の一つである収支相償の課題に配慮しながら、「ものづくり基金」の収益を上回る活動を幅広く展開しました。感染症の影響も限定的になったことから、全国のソニーグループの事業所が積極的に教室を開催することができました。また、財団主催の「ものづくり教室」を各地で実施し、ソニーグループに所属する社員も講師として参加しました。その結果、マイクロホンや自動運転など新しいコンテンツも加わり、多くの子ども達の科学への興味・関心を引き出すことができました。

（１）全国のソニーグループの事業所が開催する「ものづくり教室」への助成

本活動ではソニー教育財団が開催に関わる費用（キット、材料、会場費等）を助成して、ソニーグループの事業所が主体となって、「ものづくり教室」を実施しました。今年度はコロナ禍を経て、開催希望が寄せられる機会も増えた結果、合計 46 回、1051 名の子どもたちが参加して、ペットボトルを使ったヘッドホン、ICレコーダー、紙コップを使ったスピーカー、MESH を使ったプログラミング等を学びました。

（２）ソニー教育財団が主催する「ものづくり教室」の体制構築

「ものづくり教室」を安定的、継続的に開催することを目的として、ソニー教育財団が主催、ソニーグループ特例子会社のソニー・太陽株式会社（大分県）、ソニー希望・光株式会社（東京都）の社員が講師となり、都内近郊、長野県、新潟県などの科学館や教育委員会と協力して実施して、合計 27 回、357 名の子どもたちが参加しました。この活動では障がいがある社員も運営に関わっており、子どもたちには障がいの有無に関係なく、ものづくりの楽しさを感じ、興味を深めながら多様性について理解するきっかけにもなりました。また、教室を開催するための講師育成講座も 3 回開催し、75 名の大学生、社会人、大学の先生方、ソニー社員なども参加しました。

（３）「ものづくり教室」の新コンテンツ開発（マイクロホン）

「ものづくり教室」を拡充する方策の 1 つとして、ソニー・太陽株式会社と新コンテンツである「マイクロホン工作キット」を共同開発しました。現行の「紙コップスピーカー」の原理を応用したもので、ソニー・太陽が得意としているプロフェッショナル用のマイクロホン設計・製造を手掛けるエンジニアが中心となって考案したものです。2024 年度は、大分県の護国神社と地域のボーイスカウトの協力を得て、難易度やワークフローの検証を行い、小学生、中学生の参加者は学校の授業で得た知識を応用して、製品が作られていることも学びました。この知見を踏まえて、2025 年度は教材のキット化及び一般公募での実施を目指します。

（４）「ものづくり教室」の新コンテンツ開発（半導体を使った自動運転）

ソニーセミコンダクタソリューションズグループの支援を得て、IoT 用ボードコンピュータ SPRESENSE を使った自動運転（プログラミング）を実施しました。夏休みの 1 週間を利用して、芝浦工業大学附属中高等学校の生徒 20 名が半導体や自動運転の仕組みについて学んだ後、2 人 1 組となってプログラミングを行いました。通常、コンピュータを使ったプログラミングや AI を開発している生徒達もいましたが、仮想空間で車を走らせてみることに、ミニカーを使って実際に走らせてみるのでは、個体差や車の状態なども影響して、想定通りにはいかないことを体感してもらいました。さらに、静岡県富士中学校では、技術家庭の授業の一環として 3 時間のワークショップも開催しました。プログラミングに全く触れたことがない生徒達でも無理なく取り組むことができ、理数科目に苦手意識を持っていた生徒にも自信を持ってもらうことができました。

【公 3】 科学教育を中心とした教員の質的向上を目指す研究・研修等諸活動を支援する事業

1. 幼児教育

（１）保育者・教員組織「乳幼児のための“科学する心”ネットワーク」の運営

2020 年 6 月に発足した、保育者・教員および保育者・教員を目指す学生を対象とする組織「乳幼児のための“科学する心”ネットワーク」は、会員数が 2024 年度末に 1,180 名を超えました。「科学する心」の保育について、仲間を作り、共に学び合える環境を作るための運営を継続して行っています。メールマガジンは年に 24 回発行し、会員限定のクローズドな SNS にもさまざまな情報を発信しました。

会員特典として、ソニー教育財団が主催する研修会・実践発表会等への参加にかかる交通費（上限 1 万

円)を助成する「保育レポーター」制度や、「科学する心」の学びを深めたい意思のある会員が集まり自主的に活動する「科学する心サークル」への助成金(年間上限5万円、現8サークル活動中)の支給も、前年に引き続き実施しました。また、ネットワーク会員が年に一度リアルに集合するオフ会「夏 Fesss! (フェス)」を7月20日兵庫県にて開催し、日ごろの実践を見合ったり、悩みを相談しあったり、仲間の存在の温かさを体感する一日を過ごしていただくことができました。

(2) 外部保育研修団体(ぐうたら村)とのコラボレーション企画 保育実践ゼミナール

「やってみよう! 科学する心 × いのち真ん中社会の保育実践」第3期開催

地球に暮らす私たちにとってこれから求められる未来の保育とは何か、その中で未来を生きる子どもたちの「科学する心」をどのように育てていくのかについて考えることを目的に、2022年から保育研修団体「ぐうたら村」とともに、ゼミナール形式で開講している「保育実践ゼミナール」の第3期を開催しました。全4回の開催で、約9か月間、保育者が自ら課題を抽出して園に持ち帰り、実践したことを持ち寄りながら保育を深めていく「往還型」の実習で、ネットワーク会員から募集・選考で選ばれた10名が参加しました。

2024年度は4回のうち2回を自然豊かな「ぐうたら村」開催とし、それぞれ1泊2日、森を歩き、畑仕事をし、寝食を共にしながら、「命や自然の循環」について体感していただきました。2月8日には、ソニーグループ本社にて「最終ゼミ(ゼミ生全員による発表と講師も含めた検討)」を開催。自然の中で過ごした経験を生かし、自園にもどって子どもたち、保育者仲間と共に積み重ねてきた実践を発表していただきました。子どもを育てる保育者には、未来を創る仕事をしているという自覚を持ち、学んだ実践について、広く発信を続けていただけることを期待しています。

(3) ソニー教育財団独自の“幼保小連携”“つながるまなざし研究会”の活動展開

東京大学名誉教授・学習院大学教授の秋田喜代美先生の監修のもと、武蔵野大学の箕輪潤子先生、東海大学の竇来生志子先生を中心に、現役の4人の教員・保育者とともに2022年度に発足した幼保小連携プロジェクト「つながるまなざし研究会」の活動を積極的に行いました。ソニー教育財団の幼保小連携は、国の「架け橋特別委員会」から少し視点を変え、子どもの姿を「科学する心」でじっくりと捉えながら、保育者・教員が連携することを大切にしています。

過去2年の「研究フェーズ」を終えた2024年度は、「つながるまなざしカフェ」と称した、幼保小の保育者・教員が実際に会い、カジュアルに語り合える場や機会の増加に向け、『開催マニュアル』を整備するなど、積極的に誘致活動を行いました。その結果、保育者・教員合わせて50名ほどが参集するカフェを京都市、名古屋市、会津若松市で開催することができました。各回ともに、園と学校の実践を共有する場面と、お茶やお菓子をいただきながらじっくりと子どもについて話し合う時間が設けられ、参加者からは「このようなイベントを行政でも取り入れてみたい(教育委員会)」、「自園でも行いたいので開催手順を教えてほしい(保育者)」などの声が聞かれました。

次年度も、国による幼保小連携の枠組みやカリキュラムの整備とは異なる、子どもの「科学する心」を見つめる「幼保小連携」の普及に向け、研究会メンバーの増員を含む、新たな展開を検討しています。

2. 子ども科学教育

小中学校教員の支援

財団理念に賛同した教員の任意団体組織「ソニー科学教育研究会(SSTA)」への活動支援を中心に、小中学校の教員に対する支援を行っています。

(1) 第2期／第3期ミライティーチャーズアカデミー

子どもたちが活躍する未来社会を想定し、そのために今、必要な教育を考え、実践に移すことを求める教育界のリーダー養成を目指す新たな研修会です。第2期は2024年8月3日に成果発表会を行いました。子どもの主体性や成長を促す施策やその実践事例の発表があった一方、教員を取り巻く環境の厳しさを痛感させられる事例の報告もありました。

第3期は2024年6月に開講し、公募により集まった23名の教員が6チームに分かれ、6月のチームビルディングや意味付けのワークショップをかわきりに、教育界や実業界などの有識者の講演や勉強会を通じて未来社会への見識を広め、高い視点をもってこれからの教育を議論しています。その後、12月にはテーマ発表会を行い、最終の成果発表会は2025年8月を予定しています。

(2) ソニー科学教育研究会（SSTA）エリア研修会／支部研修会

エリア研修会はSSTAの授業研究の最上位の活動で、全国を6つのエリアに分けて、集合とオンラインを組み合わせたハイブリッド形式での発表・意見交換を中心に、都道府県を超えた先生方の交流により研究を深める大規模でオリジナルの研修会です。「科学が好きな子どもを育てる」と「問題解決学習」を共通テーマにして2023年後半よりスタートをし、2024年7月から8月にかけて6エリアそれぞれで成果を報告するイベントを行い、12月にはオンラインでの全国成果発表会が行われました。他地域の先生と大きなテーマで議論を進めることにより、新たなつながりと深い学びが生まれています。

SSTA傘下にある40の支部が独自に行う支部研修会への支援もしています。子どもたちが好奇心を高め、学びを深めることができる授業の研究を中心に様々な活動を行い、授業力のレベルアップや学級運営力の向上が図られています。若手教員に特化した研修会は2か所で予定されていましたが、残念ながら悪天候などにより2025年度に延期になりました。

以 上